



美作・備前・備中三国における 中世宝篋印塔の地域的特徴

柴田 亮

Regional characteristics of medieval stone pagodas (*hōkyō-intō*) in Mimasaka, Bizen, and Bicchū provinces

SHIBATA Ryo

Okayama University, Research Institute for the Dynamics of Civilization, Okayama city, Okayama prefecture, 700-8530, Japan

Abstract In this paper, the author clarifies the regional characteristics of medieval stone pagodas (*hōkyō-intō* 宝篋印塔) from the 13th to 14th centuries in Bizen, Bicchū, and Mimasaka provinces. The archaeological analysis was conducted typologically using 3D data from SfM and the physical and chemical analysis was conducted using magnetic susceptibility.

In Mimasaka, Bizen, and Bicchū provinces, the use of a common plan of a box-shaped pagoda was confirmed in the first half of the 14th century. In this region, the orientation of the width of the nine rings, the angle of the foundation tier shape, and other related characteristics were found to be consistent in all the analyzed pagodas.

In the latter half of the 14th century, not only did the number of pagodas increase but also pagoda shapes tended to display more variety, pointing to the possibility that several groups of stonemasons of different lineages were involved in the production of these pagodas.

Keywords Medieval period, *hōkyō-intō*, Mimasaka, Bizen, and Bicchū provinces, archaeological and physical/chemical analysis

1 はじめに

本論の目的は、美作・備前・備中三国における13世紀から14世紀代の宝篋印塔の分析によって、型式の地域的特徴を把握することである。

石塔には五輪塔や宝篋印塔、宝塔、層塔などがある。13世紀から14世紀代の石塔の多くは、有力武士が一族墓として墓域を形成する目的や、有力寺院の僧の勧進によって、大願成就の目的で建立された。よって、13世紀末から14世紀の石塔は、一個人の墓にとどまらず、領主層・武士層による地域支配装置やランドスケープを構成する要素であった。

13世紀末から14世紀の石塔の建立には、発注者（在地領主層・有力武士・有力寺院）と受注者（石工集団）

が関わっている。発注者の社会的階層や予算、設置場所、石工集団の違い、使用石材と石材の流通構造の差などによって、塔形に共通性と独自性が生じる。加えて、石塔は石ゆえに残りやすい性格を有しており、文献資料が少ない地域における歴史の解明にも役立つ。したがって、石塔は当時の死生観や宗教、階層性、共同体の範囲を読み解くための重要な素材になる。

美作・備前・備中三国に優れた石塔が存在することは、1980年代から知られていた。しかし、その多くは美術史的視点からの分析であったため、初期の石塔に宝篋印塔が多いという表層的な理解にとどまっていた。この問題の原因は、基礎研究の不足に集約される。宝篋印塔は塔形やそれぞれの部位の装飾を客観的な指標に基づいて分析する必要がある、これには考古学的な分析方法が最も適して

いる。また、近年では理化学的な分析方法が石塔研究にも応用されている。

本論では、SfM による石塔の三次元化及び実測図の作成とそれに基づく型式学的分析と帯磁率を用いた理化学的分析によって、美作・備前・備中三国における 13 世紀末から 14 世紀の宝篋印塔の基礎的データを整備する。

2 序 論

2-1 宝篋印塔の成立

岡本智子氏の整理を参考に述べる（岡本 2005a・2012）。研究の萌芽期では、宝篋印塔は呉越国王銭弘俶が諸国に分配した金属製の八万四千塔に由来すると考えられてきた。この説は主に、京都市旧妙真寺塔と塔身の迦楼蛇羅形などの特徴が類似していることに基づいていた。八万四千塔はわが国にももたらされており、これを石によって模倣することで、宝篋印塔が成立したとするのである。

その後、わが国の宝篋印塔の祖形を中国の石造宝篋印塔に求める説が再考された。中国では 12 世紀頃に銭弘俶塔を模倣した石塔が出現する。岡本智子氏は、金属塔ではなく中国で銭弘俶塔を模倣した石塔が、わが国の宝篋印塔の祖形になったと指摘する。宝篋印塔の型式の成立過程としては、舍利塔→阿育王塔→金属製宝篋印塔→中国石造宝篋印塔→わが国の宝篋印塔の順を想定している（岡本 2005b）。

わが国と中国の宝篋印塔との関係について、福建省周辺に分布する宋代の石造宝篋印塔を模倣したと指摘する研究もある。渡航した僧慶政が中国の宝篋印塔を実見したあと帰国し、石塔を建立する必要性が生じた。慶政は記憶していた中国の宝篋印塔の意匠を取り入れ、わが国の宝篋印塔の祖形を生み出したとする（山川 2015）。

京都高山寺の宝篋印塔の分析を通じて、阿育王塔の形がわが国の宝篋印塔成立に関係すると指摘する研究もある（狭川 2011b）。阿育王塔は、分骨した釈迦の遺骨を納めるために作られた仏塔である。「高山寺縁起」によれば、高山寺宝篋印塔は僧明恵の髪爪塔とされ、阿育王塔の形態を模してつくられたと想定されている。

わが国の宝篋印塔の祖形は、源流となる中国の石塔に複数の系統があり、特定の要因には絞り切れないと指摘されている（狭川 2011b）。図像の分析においても中国由来を首肯しつつ、わが国の宝篋印塔の祖形となる複数の類型の存在が指摘されており、それが断続的かつ複線的

にわが国へ伝播したと想定されている（大塚 2017）。

以上を総括すると、わが国の宝篋印塔の源流は中国にあり、いくつかの宝篋印塔の祖形がわが国に伝来する。そして、それらが日本的なフィルターを通した結果、わが国における宝篋印塔の形が成立する。その後、宝篋印塔の基本形を維持しつつ、次第に地域色が発現すると理解できる。

2-2 宝篋印塔の材質・形状と時期別分布

石材が多く、他には木製や金銅製がある。石材では、花崗岩や安山岩、凝灰岩などが用いられ、地域によって特色がある。図 1 に宝篋印塔の各部位の名称を示した。組み合わせが多く、基本的には基礎・塔身・笠・相輪の 4 つの部材で構成される。

基壇や反花座に安置される例もある。基礎は上部を二段の段形にするものや反花座にするものがある。表面は無地や格狭間を刻む。塔身は立方体に近い形状が多い。表出する四面それぞれに、金剛界四仏を示す「タラク」、キリーク、「アク」、「ウーン」や、胎藏界四仏を示す「アー」、「アン」、「アク」、「ア」の種子を彫出するものがある。また、正面だけに種子を彫出するものや、阿弥陀如来などの像容を彫出する場合もある。笠は、上下ともに段形にするものが多く、上部六段、下部二段が一般的である。軒の四隅に隅飾があ

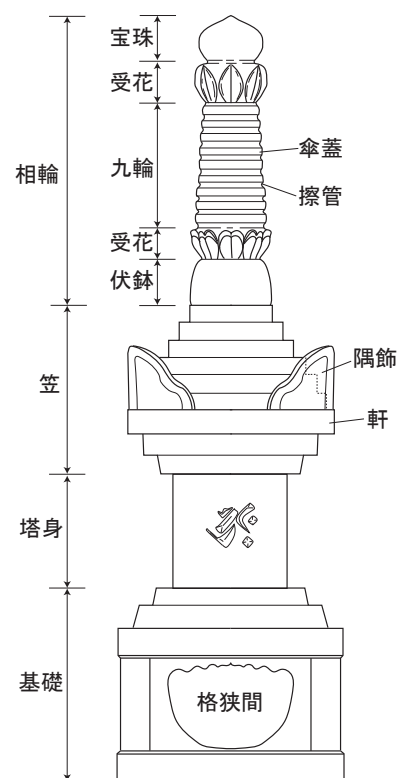


図 1 宝篋印塔の部位名称

り、その装飾は素文のもののほかに、二弧式のものや輪郭をもつものがある。相輪は、下から露盤・伏鉢・受花・九輪・受花・宝珠などの部位からなり、一石でつくられることが多い。

次に宝篋印塔の時期別の拡散過程を、先行研究を参考に述べる（狭川 2009・2011a）。宝篋印塔は 12 世紀末から 13 世紀前半に出現する。この時期に宝篋印塔の基本形が畿内で成立し、13 世紀後半にかけて畿内を中心に散発的に分布する。その後、13 世紀末から 14 世紀初頭にかけて全国的に拡散するようになり、14 世紀前半から中頃にかけて造塔階層が広まったことで建立数が増加する。15 世紀以降になると、造塔階層のさらなる拡大によって組み合わせ式の小型石塔や一石五輪塔の出土量が激増する。宝篋印塔は出土量と比例して小型化し、装飾が簡略化する傾向にある。

2-3 石塔の研究史

ここではおもに研究方法と岡山県域にかんする研究を取り上げる。

石塔をはじめとする石造物の研究は、美術史的な視点で始められた。初期の研究では、川勝政太郎氏のものが著名である（川勝 1972・1978 など）。美術史的研究は優品を中心に分析する傾向があり、その形状や年代的根拠に客観性が欠けていた。この点については、大石一久氏による悉皆的研究（大石 1999）や、狭川真一氏の考古学的研究（狭川 2011a）によって、大きな進展があった。現在では、考古学的な研究が増えており、各地で実測図をもとにした活発な議論が行われるようになった。

美作・備前・備中三国の石造物の先駆的研究は、永山卯三郎氏によるものである（永山 1930・1954）。その後、昭和 30 年代に優品が国指定にされ、それ以降、良好な資料を中心に県・市指定が行われた（岡山県教委 1980・1981）。近年では、美作・備前・備中三国の石造物についての概要をまとめた刊行物も出版されている（岡山県教委 2016）。一方で、美作・備前・備中三国は石塔研究が周辺地域よりも低調である。中国地方を対象とした考古学的分析では今岡利江氏によるものがあり（今岡 2012）、それ以降では筆者によるもの（柴田 2023a・2023b）がある。美作・備前・備中三国の石塔には大和系・京都系・近江系¹⁾の特徴が見いだされることから、それぞれの地域の石工が石塔製作に関与したことが指摘されているが（舘鼻 2023）、実態についてはまだ不明な点が多い。

多い。

美作・備前・備中三国の石塔研究については、考古学的視点からの分析が行われているが、綿密な実測図に基づくものは少なく、山陰・四国・近畿地方といった周辺地域の型式学的成果を援用した相対的評価がなされている状況である。

2-4 研究上の課題と本研究の意義

もっとも大きな課題は、基礎研究の不足である。これまでの研究によって、石塔の図化の必要性（狭川 2009）とその方法（藤澤・狭川 2017）が提示され、実測図に基づく型式学的分析が次第に増えている。しかし、美作・備前・備中三国においてはまだ不十分であり、多くの石塔が資料化されていない。これは、石塔研究において大きな問題であり、美作・備前・備中三国だけでなく周辺地域との比較検討もできない状況である。

将来的には、15 世紀から 16 世紀代の石塔の図化作業も必要になるが、この時期の石塔は数が極めて多く地域色も非常に強い。このため、研究の初期段階では、石塔の出現時期である 13 世紀から 14 世紀の宝篋印塔のうち、紀年銘を持つものや完形品を中心に図化を進めることで、型式編年作業の定点資料を作成することが先決であると考えられる。その成果により、紀年銘がないものや後世に欠損した石塔の分析が可能になる。

方法論的な課題もある。近年では、SfM を用いた研究が増加傾向にある。従来の実測方法よりもはるかに容易に石塔の展開図などが作成できるようになったが、そのデータを無批判のままに用いて分析が行われる場合がある。SfM といった手法は石塔研究にさらに活用されるべきであると考え、重要な点は専門の見地からの十分な観察を実測図や分析に反映させることである。

理化学的分析にかんしては、近年、帯磁率や放射線量をもちいた分析が行われている（黒川 2020）。しかし、理化学的分析は学会で十分に浸透しているわけではなく、計測位置や計測回数、数値処置が統一されていないため、その方法も模索段階である。

以上を踏まえると、美作・備前・備中三国の石塔の図化作業を実施する点が、本研究最大の意義であると考えられる。

山陰や四国では特徴的な石材利用や石塔型式が指摘されており（海邊 2012、今岡 2020 など）、中世石塔の拡散過程において瀬戸内海が重要な役割を果たしてきた。

美作・備前・備中三国の研究成果は、周辺地域の研究成果を面的に結ぶものであり、汎西日本的な石塔文化の展開を明らかにする上で不可欠である。また、本研究によって、美作・備前・備中三国における宝篋印塔の編年の定点がつくられる。これは美作・備前・備中三国にとどまらず、瀬戸内海沿岸地域の石塔の成立と展開を考察する上で重要な成果である。

また、理化学的分析によって、石材の供給圏についても検証可能である。石塔にもちいる石材の中には、日引石や笏谷石²⁾のようにブランド化して他地域に流通するものがある。石材の理化学的分析結果は、石塔や石材流通の経済史や石造物をつくる石工の動向を検証する基礎となる。

3 分析方法と分析対象

3-1 分析方法

考古学的分析は、基本的に過去に提示した方法に準ずる（柴田 2023a・2023b）。狭川氏が推奨する「建築実測図タイプ」をベースとし（藤澤・狭川 2017）、Metashape による三次元計測図をもとに実測図を作成する方法である。その際は、現地での計測や観察に基づき石塔の歪みなどを適宜修正して図化を行う。石塔本来の形状が復元できるものについては可能な限り復元し、最も残りがよく石塔本来の特徴を反映する部分を判断し、実測箇所とする。左右は基本的に対象とし、直線で作ろうとした部分は、フリーハンドではなく定規による直線で表現する。断面表現は必要箇所にとどめ、破損が強い部分は復元線によって補足する。表面の荒れや自然現象による模様といった石材の特徴は図面に表現せず、必要に応じて写真で対応する。

石塔に刻まれた種子や銘文については、「ひかり拓本」を用いた記録を行う。ひかり拓本は、奈良文化財研究所から公表されたもので、石に刻まれた文字や文様に光を当て、その影から拓本をとる技術である。

石塔には、現在でも信仰の対象となるものや指定文化財が含まれるため、調査には慎重を期する必要がある。SfM による三次元計測やひかり拓本は石塔に非接触で記録をとれるため、高精度であるだけでなく、調査による石塔へのダメージが低く、石塔の調査に適合する。

次に理化学的分析の方法について述べる。理化学的分析は帯磁率の比較を行う。帯磁率は石材の磁化のしやすさの指標であり、磁性鉱物の含有量によって左右されるこ



図2 帯磁率の計測位置

とから、石材の比較に応用できる。機器は携帯型帯磁率計測器 SM-30 を用いる。計測位置は各部材で4か所の、計16か所とする（図2）。基礎と塔身は中央部、笠は軒の中央部とする。相輪は宝篋印塔の中心線上にある伏鉢を計測する。計測機器の機能上、測定面は可能な限り平滑であることが望ましいため、欠損による凹凸がある場合は各部材の計測位置にもっとも近く、平滑で欠損のない部分を計測する。計測位置による数値の差を最小にするため、帯磁率の比較には各部材の平均値を用いる。

実測図を用いて各部材の形状や法量、装飾等の比較によって、各国の宝篋印塔の型式差を明らかにする。また、帯磁率の比較によって使用石材の各国の違いを明らかにする。

3-2 分析対象

美作・備前・備中三国における主要な石塔の分布を図3に示した。また、個別で石塔について述べる場合には、図3の番号と対応する数字を（ ）に入れて示す。例えば、熊山宝篋印塔の場合は、熊山宝篋印塔（11）となる。また、図3に示した22基のうち、本論で分析の対象とするのは9基である。

以下に、新規で実測図を提示する宝篋印塔について概要を述べる。

(1) 熊山宝篋印塔

a. 所在地

岡山県赤磐市奥吉原（旧赤磐郡熊山町）の熊山に所在する。熊山は標高 509 m で、岡山県南部で最高峰である。この一帯は、古代から中世にかけて栄えた霊山寺（天台宗）の寺域に該当し、一帯の山塊を中心に 33 カ所の石積遺

構が残る。その中で最大かつ特殊な三段方形の石積遺構は熊山遺跡と呼称され、昭和 31 年 9 月 27 日に国指定史跡に指定された（熊山町教委 1974）。

分析対象となる宝篋印塔は、遺跡管理棟南東の階段脇に安置されている。

b. 基礎データ（図 4）

【基礎】

幅 36.5cm、高さ 29cm である。基礎の上面は二段の段形で、

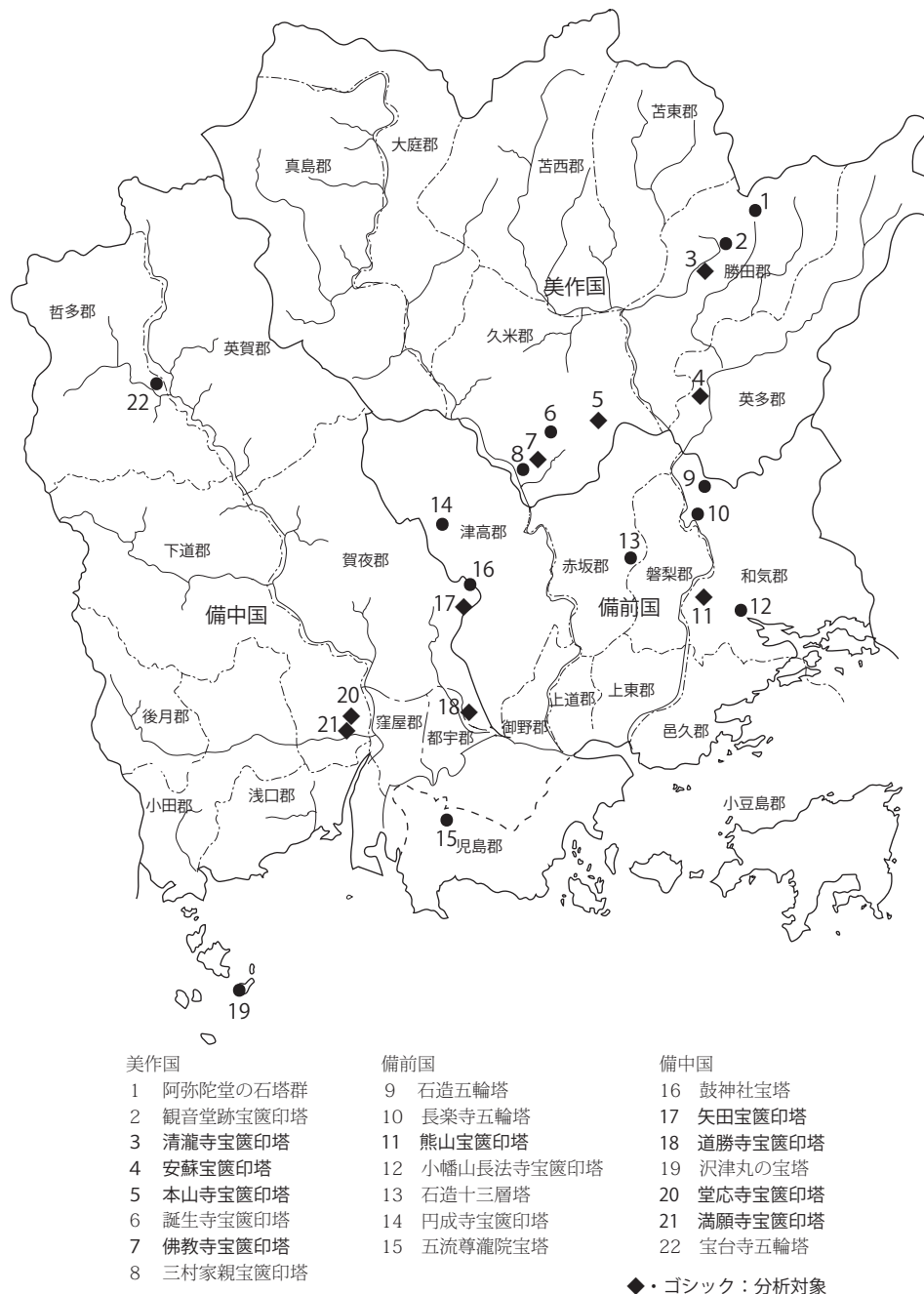


図 3 13 世紀末から 14 世紀における岡山県域の主要石塔分布図

段端部はやや斜めに調整される。下段は最大幅 31.5cm、最小幅 30cm、高さ 3cm、上段は最大幅 25cm、最小幅 23.5cm、高さ 3.5cmである。格狭間はない。

【塔身】

高さ 18cm、幅 18.5cmの方形である。金剛界四仏の種子が施されており、月輪はない。種子は薬研彫りである。正面の種子の右側に、「僧頭空 正応五年」、左側面に「七月十日」の銘がある。文字は摩滅が著しく、彫りの技術が稚拙であることから、追刻の可能性はある。

【笠】

軒部分から上に六段、下に二段の段形状に作られている。段端部はやや斜めに調整される。隅飾は二弧式で輪郭を有する。笠全体高は 25.5cmである。軒部の幅は 31.5cm、高さ 4cmで、四隅の上端部はやや傾斜する。隅飾は幅 8.5cm、高さ 10.5cmである。

【相輪】

九輪最上部より上は欠損しており、詳細は不明である。最大高 26.5cmである。伏鉢は下端径 11.5cm、上端径 8cm、高さ 6.5cmである。下段の受花は最大径が 11cm、高さ 4

cmで、八弁の単弁蓮華文が表現されている。九輪の最下輪の径は 10.5cmである。

(2) 矢田宝篋印塔

a. 所在地および発掘調査成果 (図5～7)

岡山県岡山市北区山上に所在する。岡山市北部の吉備高原の山間部、丘陵南端の中腹に立地する。岡山市指定文化財である。

指定から数年後の昭和 60 年頃に、一般県道岡山賀陽線の新設ルート（吉備新線）の建設が予定され、当宝篋印塔がそのルート上に該当した。協議の結果、宝篋印塔は移転することになり、移転に際して専門業者による完全な復元をはかり、当初の所在地については岡山市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

矢田宝篋印塔は石塔の発掘調査が実施された、岡山県域で数少ない事例である。発掘調査では、石囲み基壇や土坑がみつまっている (図 5)。石囲み基壇は、当初の石塔の位置から南西に 3.5m の場所にあった。切盛土で整地し、コの字形で尾根先端に向かってやや開く。50cm 程の花崗岩の角礫が用いられ、東半は欠損する。基壇中央には盗掘穴がうがたれており、埋葬施設などはみつからない。報告書中では、矢田宝篋印塔は本来 2m 四方の基壇上に安置されていたと想定されている。

石囲み基壇の周囲には 5 基の土坑がある。いずれも人骨等は発見されなかったが、土坑 1 や土坑 2 は隅丸方形に近く、内部に礫が含まれている。土坑 3 では底面に炭が 1cm 堆積しており、土坑 4 では、ほぼ完形の土師器椀が 1 点出土している。土坑 5 は底面に焼土や炭が広がっている。これらの要素は土坑が埋葬施設やそれに関連する遺構であった可能性を示唆する。

石塔のデータ (図 7)

b. 石塔のデータ (図 7)

【基礎】

幅 49cm、高さ 38cmである。基礎の上面は二段の段形で、下段は幅 40cm、高さ 5cm、上段は幅 31cm、高さ 4cmである。背面をのぞく三面には全体を約 1cm 彫りくぼめた長方形

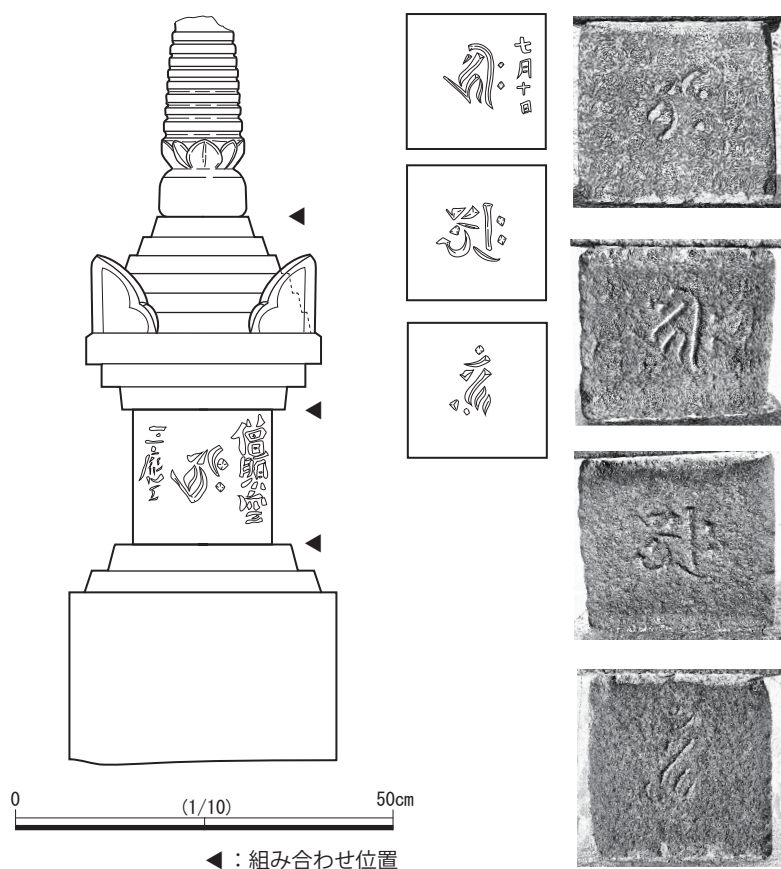


図 4 熊山宝篋印塔実測図 (S = 1/10)

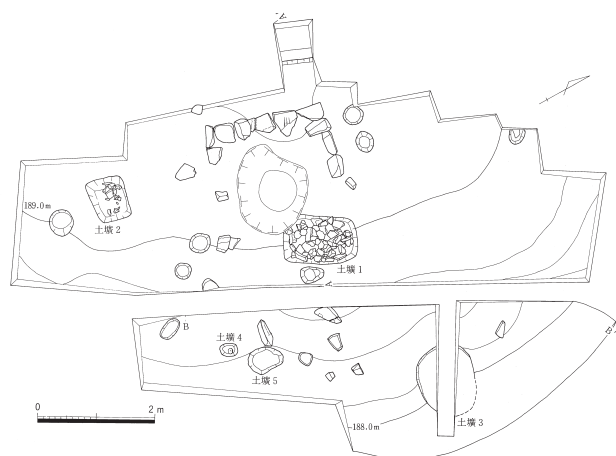


図5 矢田宝篋印塔遺構全体図

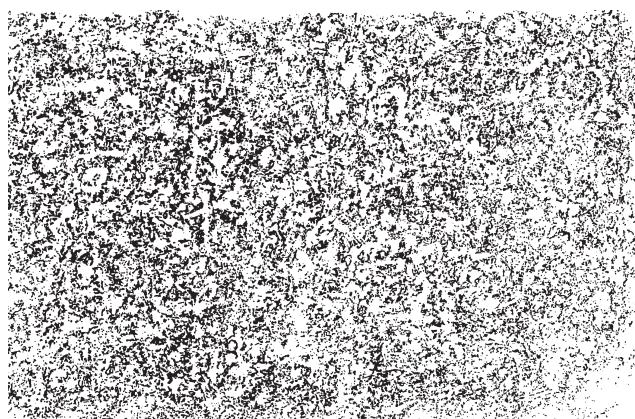


図6 矢田宝篋印塔基礎背面拓本

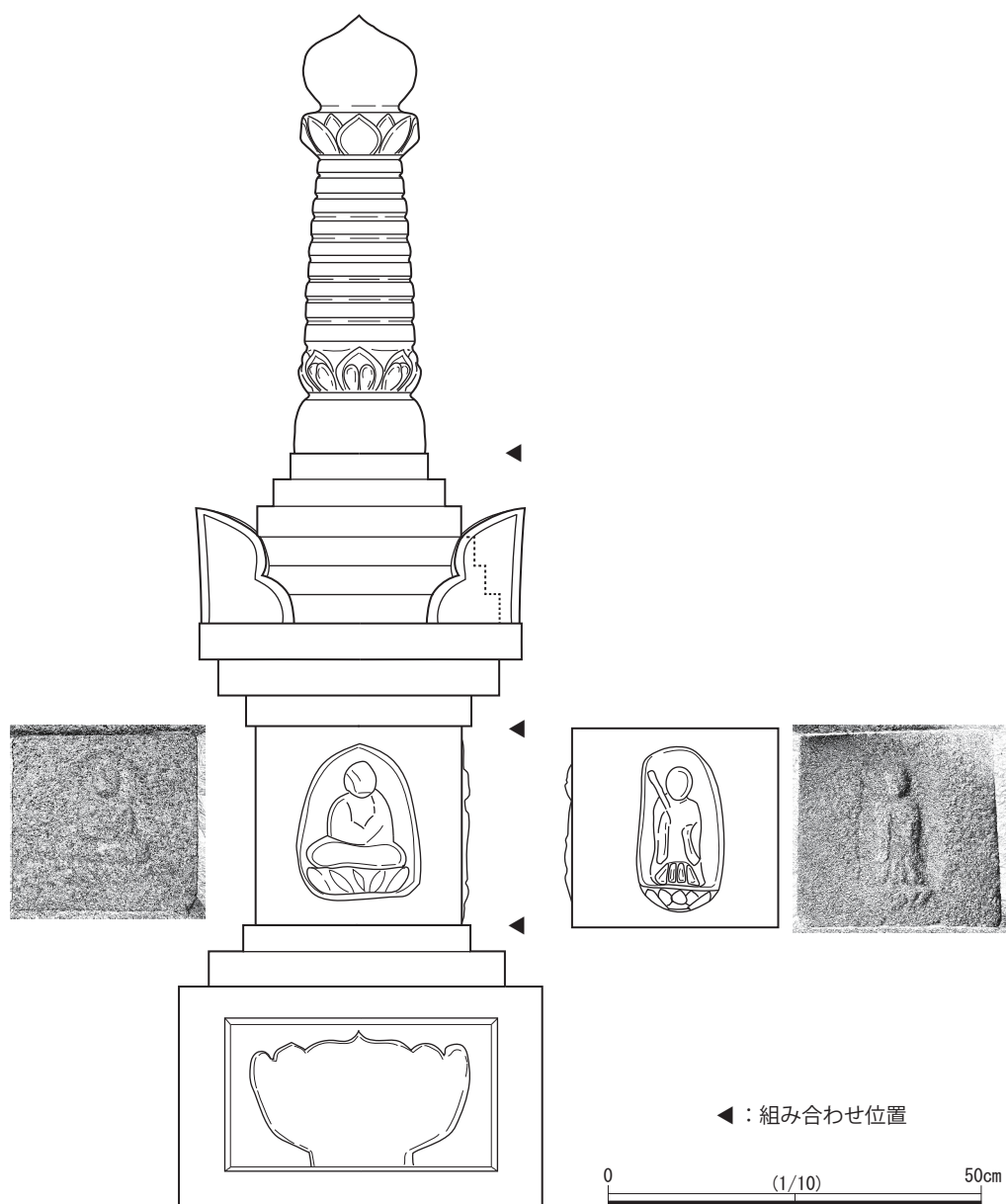


図7 矢田宝篋印塔実測図 (S = 1/10)

区画を中央部に配し、その中に格狭間を彫出する。格狭間も全体的に約1cm彫りくぼめられている。

背面には「貞治五年四月十五日」、「一結衆」などの文字が刻まれている（図6、岡山市教委1992）。実物を確認したところ摩滅によって判読や実測は困難であった。

【塔身】

高さ27cm、幅28cmの方形である。正面に蓮華座に座す阿弥陀如来座像、右側面には地藏菩薩の像容が彫出されている。その他は素文である。上下両面にほぞ穴を作り出している。塔身正面の阿弥陀如来は、浄土信仰（極楽往生祈念）に関わる可能性が高く、基礎背面の「一結衆」は、念仏講結集との推測も可能である。

【笠】

軒部分から上に六段、下に二段の段形に作られている。笠全体高は37cmである。軒部の幅は43.5cm、高さ5cmである。報告書中では示されていないが、隅飾は二弧式で輪郭を有する。隅飾はやや外反する。

【相輪】

高さ59cmである。伏鉢は下端径18cm、上端径14cm、高さ7.5cmである。下段の受花は最大径が16.5cm、高さ6.5cmで、8枚の複弁蓮華文が表現される。九輪の最下輪の径は15cm、最上輪の径は11.5cmである。上部の受花は、最大径が16cm、高さ5.5cmで、8枚の単弁蓮華文と間弁が表現される。宝珠は、最大径15.5cm、高さ13.5cmである。やや背が低く、先端部は尖りがある。丸みがやや欠けており、形の変換点に稜が生じている。

（3）道勝寺跡宝篋印塔（伝妹尾兼安供養塔）

a. 所在地と伝承

岡山県岡山市北区吉備津に所在する。石塔の所在地は、名越山の南辺と吉備中山の北西辺の間の平野上に位置している。宗派は不明である。所在地のすぐ北側には榮西の生誕地とされる場所が存在し、東側には備中国一宮である吉備津神社が鎮座している。

当該宝篋印塔は、寿永2（1183）年に、木曾義仲の軍に追われ戦死した平家方の武将、妹尾兼安の供養塔と伝わる。

b. 石塔のデータ（図8）

【基礎】

幅49.5cm、高さ35cmである。基礎上面は反花座であり、その高さは8cmである。四面に全体を約1cm彫りくぼめた長方形区画を中央部に配し、その中に格狭間を彫出する。格狭間も全体的に約1cm彫りくぼめられている。基礎の下

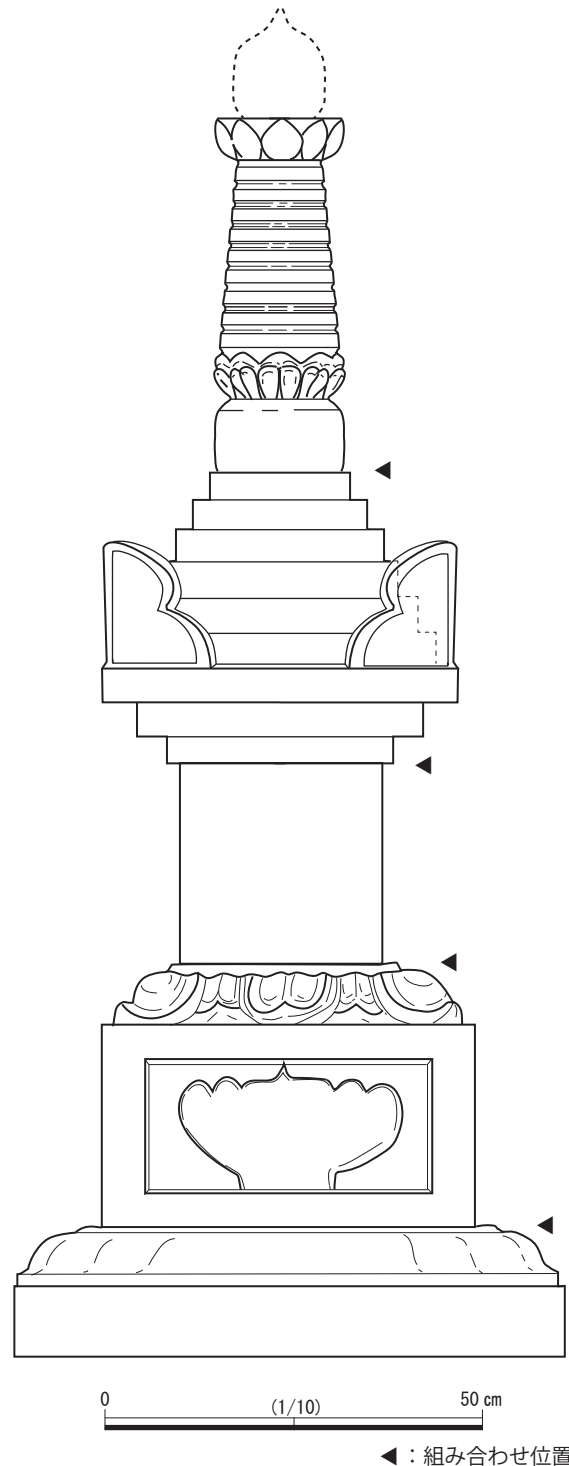


図8 道勝寺宝篋印塔実測図（S = 1/10）

には台座を有する。台座の上段は曲線的に仕上げられているが、反花は表現されない。

【塔身】

高さ26.5cm、幅27cmの方形である。素文である。

【笠】

軒部分から上に六段、下に二段の段形に作られている。

笠全体高は 38cm である。軒部の幅は 47cm、高さ 4.5cm である。隅飾は二弧式で輪郭を有する。隅飾は直立する。

【相輪】

宝珠は後補であるため、計測から除外する。最大高は 47cm である。伏鉢は下端径 17cm、上端径 13cm、高さ 10cm である。下段の受花は最大径が 17cm、高さ 6cm で、8 枚の複弁蓮華文が表現される。九輪の最下輪の径は 16cm、最上輪の径は 11cm である。上部の受花は、最大径が 17cm、高さ 5.5cm で、8 枚の単弁蓮華文が表現される。

(4) 佛教寺宝篋印塔

a. 所在地

岡山県久米郡久米南町仏教寺に所在する。佛教寺は和銅 3 年（710）喜恵上人が開山、肩野部長者乙麻呂が創建したとされる真言宗の寺院である。元慶 3 年（879）には、陽成天皇の勅願道場として、四十九院建立、近隣に比類なき伽藍美を誇ったが、天正 9 年（1581）に消失した。その後再建したがわずか六院だった。明治初年まで六院あったが、竹林寺（佛教寺別院）の文殊堂を移して本堂とした。

b. 石塔のデータ（図 9）

【基礎】

幅 53cm、高さ 39cm である。基礎上面は反花座であり、その高さは 9cm である。背面をのぞく三面には全体を約 1cm 彫りくぼめた長方形区画を中央部に配し、その中に格狭間を彫出する。格狭間も全体的に約 1cm 彫りくぼめられている。

「願以此功德 普及於一切」「我等興衆生 皆共成仏道」という天台宗や真言宗の回向文と、「文和三年(1354)甲午十月十五日」「大願主磊明敬白」が彫出されている（岡山県教委 1981）。

【塔身】

高さ 28cm、幅 29.5cm の方形である。金剛界四仏の種子を有する。種子の下には線刻の蓮華文が施され、月輪を有している。

【笠】

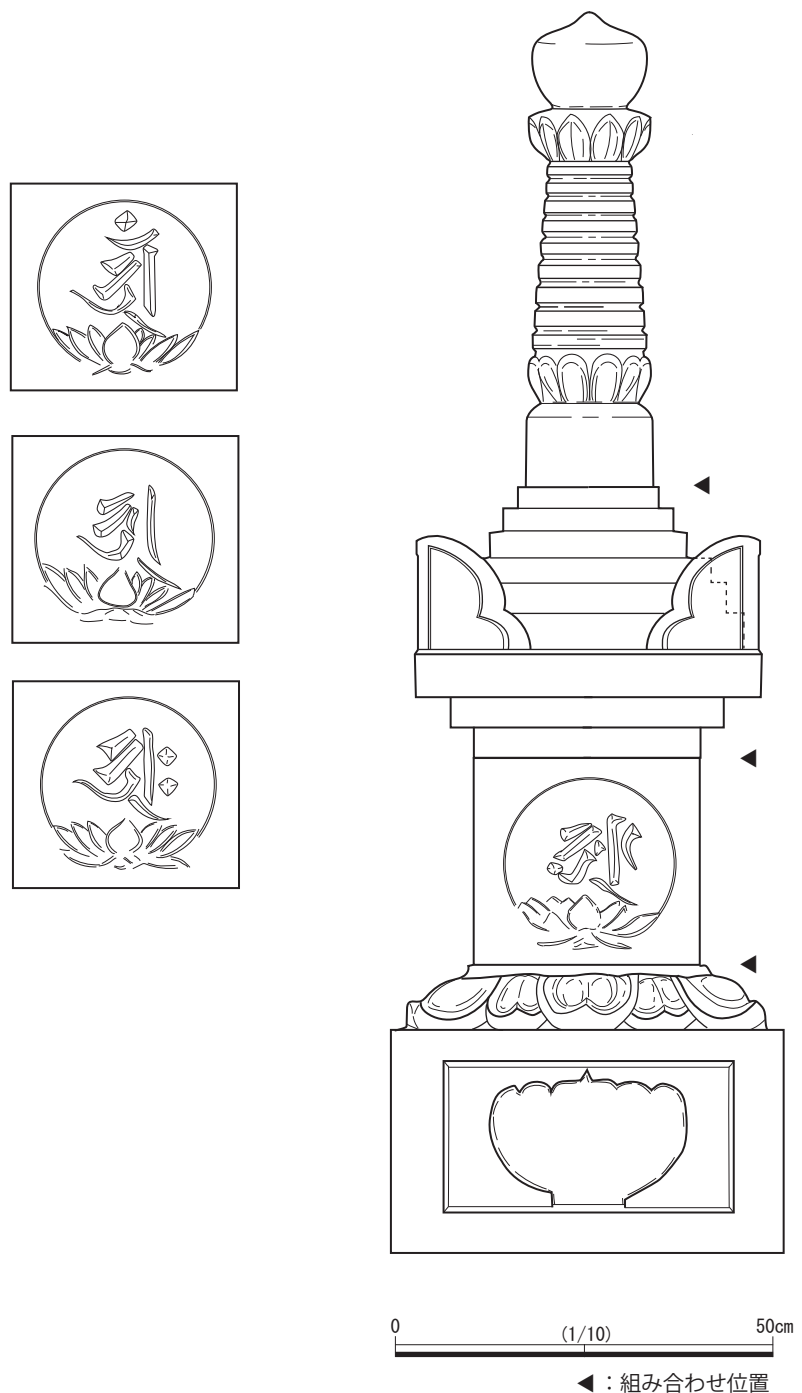


図 9 佛教寺宝篋印塔実測図 (S = 1/10)

軒部分から上に六段、下に二段の段形に作られている。笠全体高は 36.5cm である。軒部の幅は 47cm、高さ 6.6cm である。隅飾は二弧式で輪郭を有する。隅飾は直立する。

【相輪】

高さ 64cm である。伏鉢は下端径 17cm、上端径 13.5cm、高さ 11cm である。下段の受花は最大径が 17cm、高

さ6.5cmで、10枚の単弁蓮華文が表現される。九輪の最下輪の径は15.5cm、最上輪の径は11.5cmである。上部の受花は、最大径が16.5cm、高さ7cmで、10枚の単弁蓮華文が表現される。宝珠は、最大径15.5cm、高さ13cmである。先端部は尖りがある。

(5) 清瀧寺宝篋印塔

a. 所在地

岡山県津山市河面に所在する。清瀧寺は弘仁十二年（821年）に、嵯峨天皇の勅旨により空海が開基したとされる真言宗の寺院である。現建物は寛文九年（1669年）時の城主森忠政侯の寄進によって再建されたものである。

b. 石塔のデータ（図10）

【基礎】

幅51.5cm、高さ37cmである。基礎の上面は二段の段形で、下段は45幅cm、高さ4.5cm、上段は幅33cm、高さ4.5cmである。四面には全体を約1cm彫りくぼめた長方形区画を中央部に配し、その中に格狭間を彫出する。格狭間も全体的に約1cm彫りくぼめられ、内部に開敷蓮華文を有する。

「三千部妙典納口」「延文五年（1360）庚子三月」「願主沙門祐盛敬白」の銘文を有する（日本石造物辞典編集委員会2012）。

【塔身】

高さ26cm、幅27.5cmの方形である。金剛界四仏の種子を有しており、月輪はない。

【笠】

軒部分から上に六段、下に二段の段形に作られている。笠全体高は41.5cmである。軒部の幅は46.5cm、高さ4.5cmである。隅飾は二弧式で輪郭を有し、内部に種子が施される。隅飾は外反する。

【相輪】

伏鉢と宝珠直下の受花がない点が特徴である。高さ47.5cmである。下段の受花は最大径が20.5cm、高さ8cmで、6枚の複弁蓮華文が表現される。九輪の最下輪の径は17.5cm、最上輪の径は17cmである。宝珠は、最大径16cm、高さ11.5cmである。

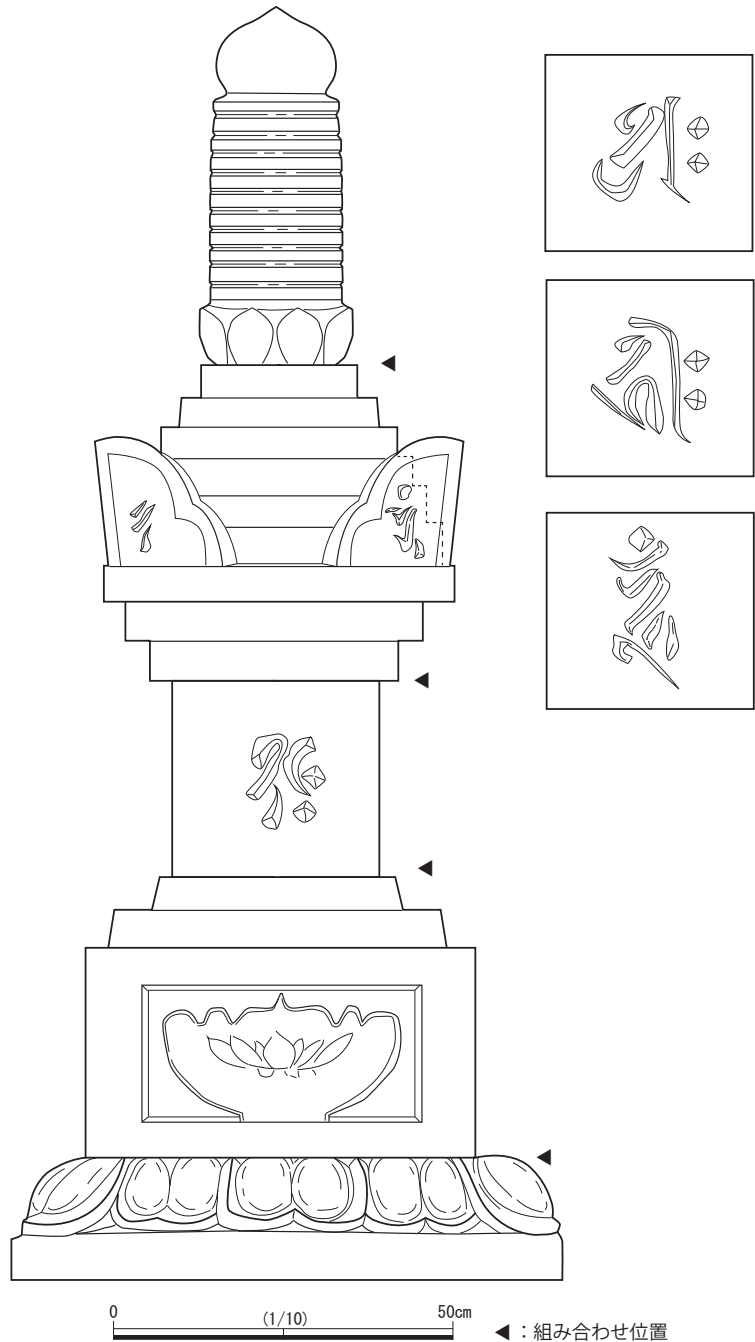


図10 清瀧寺宝篋印塔実測図（S = 1/10）

(6) 過去に分析した宝篋印塔

すでに基礎データや図面を公開したもので、今回の分析に使用する宝篋印塔について、概略を述べる。対象は、安蘇宝篋印塔（4）・本山寺（5）（柴田2023a）と堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）（2023b）である。

安蘇宝篋印塔（4）は、岡山県美作市安蘇に所在する。花崗岩製で、ほぼ完形かつ正中二年（1325）の紀年銘が残る。本山寺宝篋印塔（5）は、岡山県久米郡美咲町

に所在する、天台宗本山寺の敷地内に所在する。花崗岩製で、ほぼ完形かつ建武二年（1335）の紀年銘を有する。堂応寺宝篋印塔（20）は、岡山県倉敷市真備町辻田堂応寺に所在する。花崗岩製で、ほぼ完形かつ正和3（1314）年の紀年銘が残る。塔高 326cm であり、在銘宝篋印塔の中では岡山県域で最大である。満願寺宝篋印塔（21）は、岡山県倉敷市真備町辻田に所在する。花崗岩製でほぼ完形で、塔高 304cm の大型品である。紀年銘は有していない。

（7）帯磁率

表 2 に提示する。

備前国 熊山宝篋印塔（11）の各部材の平均値は、基礎：0.622（ 10^{-3} ）、塔身：0.603（ 10^{-3} ）、笠：1.548（ 10^{-3} ）、相輪：0.893（ 10^{-3} ）である。

備中国 堂応寺宝篋印塔（20）の各部材の平均値は、基礎：0.134（ 10^{-3} ）、塔身：0.320（ 10^{-3} ）、笠：0.160（ 10^{-3} ）、相輪：0.257（ 10^{-3} ）である。満願寺宝篋印塔（21）の各部材の平均値は、基礎：0.198（ 10^{-3} ）、塔身：0.207（ 10^{-3} ）、笠：0.144（ 10^{-3} ）、相輪：0.123（ 10^{-3} ）である。矢田宝篋印塔（17）の各部材の平均値は、基礎：0.073（ 10^{-3} ）、塔身：0.303（ 10^{-3} ）、笠：0.268（ 10^{-3} ）、相輪：0.255（ 10^{-3} ）である。道勝寺宝篋印塔（18）の各部材の平均値は、基礎：0.072（ 10^{-3} ）、塔身：0.093（ 10^{-3} ）、笠：0.070（ 10^{-3} ）、相輪：0.085（ 10^{-3} ）である。

美作国 本山寺宝篋印塔（5）の各部材の平均値は、基礎：0.821（ 10^{-3} ）、塔身：0.594（ 10^{-3} ）、笠：0.679（ 10^{-3} ）、相輪：8.245（ 10^{-3} ）である。安蘇宝篋印塔（4）の各部材の平均値は、基礎：0.548（ 10^{-3} ）、塔身：0.150（ 10^{-3} ）、笠：0.128（ 10^{-3} ）、相輪：0.966（ 10^{-3} ）である。佛教寺宝篋印塔（7）の各部材の平均値は、基礎：1.613（ 10^{-3} ）、塔身：1.750（ 10^{-3} ）、笠：1.480（ 10^{-3} ）、相輪：0.045（ 10^{-3} ）である。清瀧寺宝篋印塔（3）の各部材の平均値は、基礎：15.475（ 10^{-3} ）、塔身：14.975（ 10^{-3} ）、笠：12.150（ 10^{-3} ）、相輪：14.125（ 10^{-3} ）である。

4 分析結果

縮尺 10 分の 1 の実測図をもとに、図 12 に示す位置を cm 単位で計測する。各宝篋印塔の計測値は表 1 に、そのグラフ比較は図 11 に示した。以下に、各部材の特徴について述べる。

【相輪】

堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）が、それ以外の

宝篋印塔に比べて大きさが顕著であり、熊山宝篋印塔は小さい傾向にある。相輪の大きさは塔形の大きさと比例する傾向が認められる。

九輪の上端幅と下端幅の差が最も大きいのは矢田宝篋印塔（17）で 0.35cm、最も小さいのは清瀧寺宝篋印塔（3）で 0.05cm である。このほかの宝篋印塔では 0.4 ～ 0.6cm である。九輪の上下端幅の最大値と最小値の差は、相輪全体の最大値と最小値の差よりも小さいため、相輪幅には一定の志向性があったことが予測される。

受花の装飾に、国単位での統一性は認められない。

【笠】

堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）とそれ以外の宝篋印塔で笠の形に大きな違いがある。特に、笠高に対する笠最大幅が大きい。

隅飾については、堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）は隅飾幅が隅飾高に対して大きく、強く外反している。ほかの宝篋印塔については、隅飾幅と隅飾高が一致する佛教寺、隅飾高が隅飾幅に対して大きい熊山（11）・矢田宝篋印塔（17）・道勝寺（18）・清瀧寺（3）、隅飾高が隅飾幅に対して小さい安蘇（4）・本山寺宝篋印塔（5）に大別される。

【塔身】

塔身の高さと幅がほぼ同じ規模である。塔身に施される装飾は、金剛界四仏の種子を四面に彫出することを基本としているが、像容を用いるものや月輪・線刻の蓮華文を施すものがある。装飾には多様性があり、国単位での統一性は認められない。

【基礎】

堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）は基礎全体高に対して基礎幅が大きい。そのほかの宝篋印塔は基礎全体高と基礎幅の比率がほぼ一致するが、美作国の宝篋印塔の基礎幅が 5 cm 以上であることに對し、備前国と堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）を除く備中国の宝篋印塔は 5 cm 未満である。美作国の基礎幅は若干大きい傾向がある。

基礎上面は 2 段の段形が多いが、反花の装飾をもつものもあり、国単位での統一性は認められない。

【段形の比較】

塔形全体のフォルムを比較するため、狭川氏の分析方法（狭川 2019（初出 2011））を参考に図 13 を示した。図 13 は、塔身から笠と基礎の段形部分に沿って線を引き、縮尺を任意で変えて重ね合わせることで、塔の形状を比較

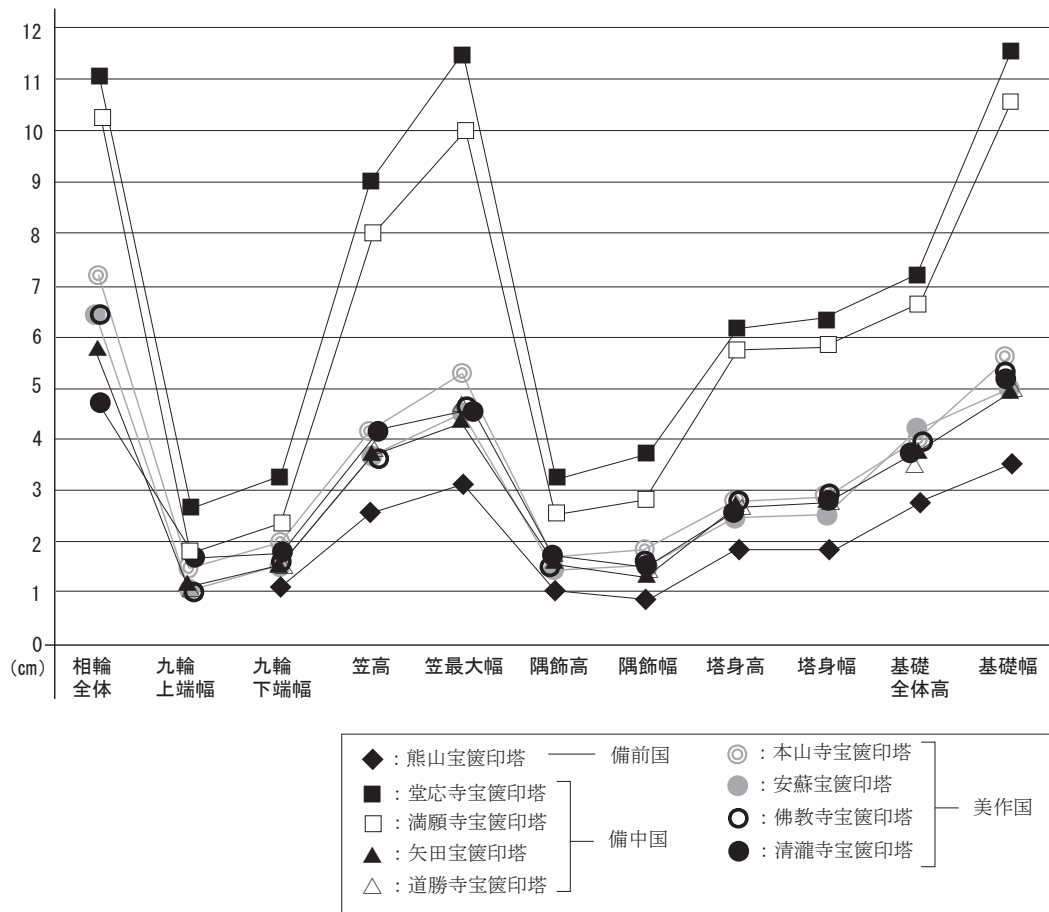


図 11 宝篋印塔の計測数値比較図

表 1 宝篋印塔の計測数値一覧表 (cm)

計測位置	備前国	備中国					美作国			
	熊山	矢田	道勝寺	堂応寺	満願寺	本山寺	安蘇	佛教寺	清瀧寺	
相輪全体	-	5.8	-	11.1	10.3	7.2	6.4	6.4	4.75	
九輪上端幅	-	1.15	1.1	2.6	1.75	1.5	1.1	1.15	1.7	
九輪下端幅	1.05	1.5	1.6	3.2	2.35	2	1.55	1.55	1.75	
笠高	2.55	3.6	3.8	9	8	4.2	3.7	3.65	4.15	
笠最大幅	3.15	4.35	4.7	11.5	9.95	5.3	4.55	4.7	4.65	
隅飾高	1	1.55	1.65	3.2	2.55	1.7	1.45	1.55	1.7	
隅飾幅	0.85	1.3	1.4	3.7	2.8	1.85	1.5	1.55	1.5	
塔身高	1.85	2.65	2.65	6.15	5.7	2.8	2.5	2.8	2.6	
塔身幅	1.85	2.75	2.7	6.3	5.8	2.9	2.5	2.95	2.75	
基礎全体高	2.8	3.75	3.5	7.2	6.6	4.05	4.2	3.9	3.7	
基礎幅	3.55	4.9	4.95	11.5	10.5	5.6	5	5.3	5.15	

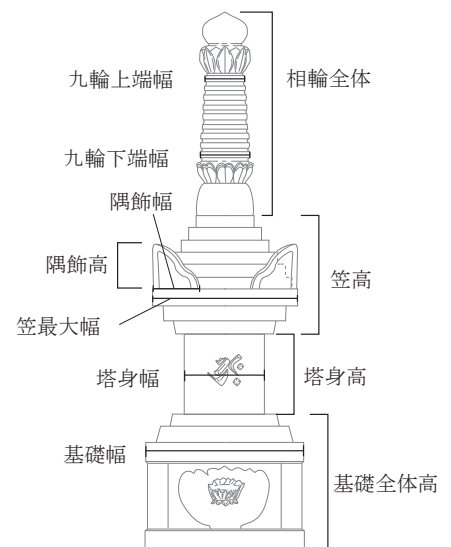


図 12 計測位置

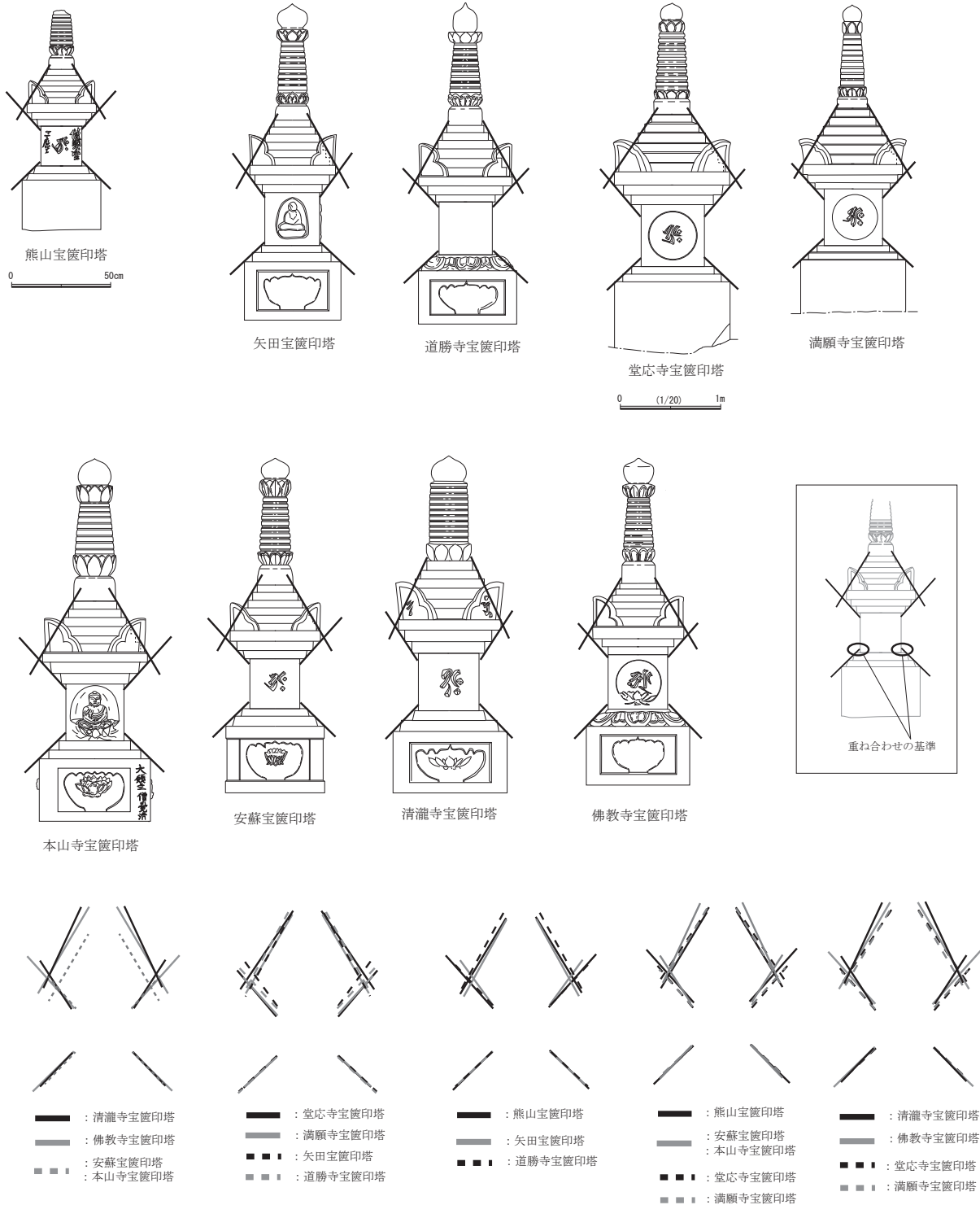


図 13 段形部分の比較

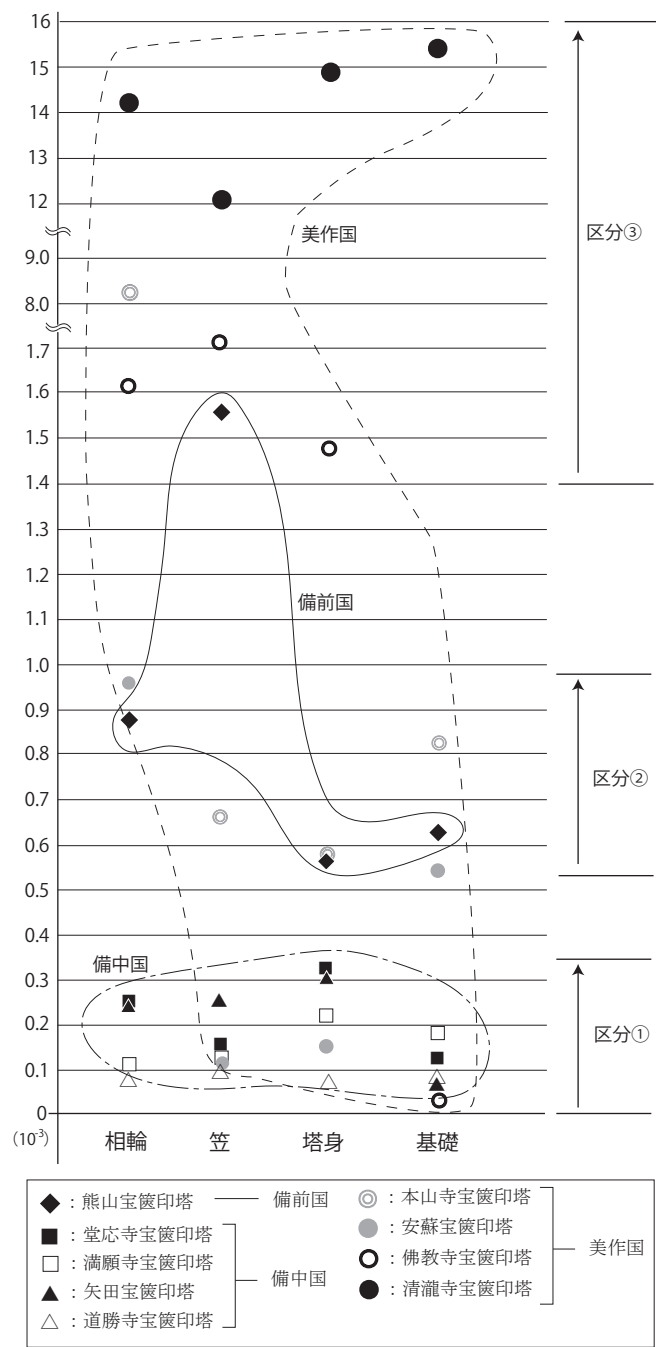


図 14 帯磁率比較

したものである。重ね合わせの基準は、基礎の斜線が塔身と交わる頂点部とした。

ここで注目すべきは、基礎全体高や基礎幅は一樣ではないことに対し、基礎段形の角度が対象とした宝篋印塔で一致する点である。

【帯磁率】

表 2 をもとに、図 14 に散布図を示した。帯磁率は① 0.33 (10^{-3}) 以下、② 0.548 (10^{-3}) 以上かつ 0.966 (10^{-3})

表 2 帯磁率集計表 (10^{-3})

熊山	1	2	3	4	平均
相輪	0.982	0.858	0.933	0.799	0.893
笠	1.95	1.46	1.46	1.32	1.548
塔身	0.668	0.624	0.513	0.605	0.603
基礎	0.576	0.703	0.537	0.672	0.622

堂応寺	1	2	3	4	平均
相輪	0.101	0.149	0.66	0.119	0.257
笠	0.149	0.156	0.15	0.183	0.160
塔身	0.142	0.105	0.102	0.93	0.320
基礎	0.1	0.156	0.135	0.145	0.134

満願寺	1	2	3	4	平均
相輪	0.123	0.159	0.102	0.109	0.123
笠	0.146	0.018	0.146	0.264	0.144
塔身	0.15	0.134	0.252	0.291	0.207
基礎	0.197	0.267	0.165	0.163	0.198

矢田	1	2	3	4	平均
相輪	0.275	0.342	0.207	0.197	0.255
笠	0.412	0.224	0.206	0.229	0.268
塔身	0.398	0.31	0.3	0.203	0.303
基礎	0.102	0.104	0.045	0.04	0.073

道勝寺	1	2	3	4	平均
相輪	0.087	0.043	0.09	0.068	0.072
笠	0.112	0.094	0.08	0.085	0.093
塔身	0.084	0.072	0.045	0.078	0.070
基礎	0.08	0.095	0.095	0.069	0.085

本山寺	1	2	3	4	平均
相輪	6.44	8.46	8.51	9.57	8.245
笠	0.652	0.376	0.347	1.34	0.679
塔身	0.267	0.664	0.801	0.644	0.594
基礎	0.576	0.312	0.555	1.84	0.821

安蘇	1	2	3	4	平均
相輪	0.86	0.97	0.815	1.22	0.966
笠	0.135	0.122	0.144	0.109	0.128
塔身	0.161	0.172	0.154	0.114	0.150
基礎	0.478	0.577	0.589	0.547	0.548

佛教寺	1	2	3	4	平均
相輪	1.57	1.66	1.6	1.62	1.613
笠	1.67	1.78	2.07	1.48	1.750
塔身	1.52	1.57	1.3	1.53	1.480
基礎	0.021	0.056	0.047	0.055	0.045

清瀧寺	1	2	3	4	平均
相輪	14	13.1	16.5	12.9	14.125
笠	13	12.8	11.9	10.9	12.150
塔身	14.5	16.5	14.2	14.7	14.975
基礎	14.1	16.6	16.7	14.5	15.475

以下、③ 1.5 (10^{-3}) 以上の 3 群に大別される。以下、これを区分①・②・③と呼称する。

区分①に該当する宝篋印塔は、安蘇 (4)・佛教寺 (7)・矢田宝篋印塔 (17)・堂応寺 (20)・満願寺 (21) である。このうち、安蘇宝篋印塔 (4) は、笠と塔身が区分①に、相輪と基礎は区分②に該当する。佛教寺宝篋印塔 (7) は基礎・塔身・笠が区分③、相輪のみ区分①に該当する。区分②に該当するのは、安蘇 (4)・本山寺 (5)・熊山

宝篋印塔（11）である。このうち、本山寺宝篋印塔（5）は相輪が、熊山宝篋印塔（11）は笠が区分③に該当する。石塔一基当たりの平均値は部材間で近似値を示すが、部材によって差が生じるものが混じる。清瀧寺宝篋印塔（3）はすべての部材が区分③に該当する。

美作国～備前国は区分②～③に該当する宝篋印塔の割合が高く、備中国は区分①にのみ該当する。美作国～備前国の宝篋印塔は全体的に帯磁率が高いことに加え、個体差が大きく、全体的な傾向を見出しがたい。備中国は帯磁率が低い傾向にあり、緩やかな傾向が認められる。

5 考 察

5-1 分析結果のまとめ

堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）は、ほかの宝篋印塔と一線を画した形態的特徴を持つ。それ以外の宝篋印塔について、相輪部分は九輪の幅に共通した志向性を看取できるが、高さや装飾に一貫した傾向はない。基礎段形の角度は分析対象すべてで合致するが、美作国の基礎幅は、備前・備中国に比べてわずかに大きい傾向がある。

安蘇（4）・本山寺宝篋印塔（5）のみ笠の段形の角度は一致するが、それ以外は一致しない。隅飾の形状は、二弧式という点のみすべての宝篋印塔が共通する。一方で、隅飾の幅や高さ、外反の強さには違いが生じている。塔身の装飾は、基本的に金剛界四仏の種子を彫るものを基本とし、装飾等については多様性がある。

帯磁率は区分① $0.33 (10^{-3})$ 以下、区分② $0.548 (10^{-3})$ 以上かつ $0.966 (10^{-3})$ 、区分③ $1.5 (10^{-3})$ 以上の3群に大別される。石塔一基あたりの平均値は近似するが、備前国と美作国には部材によって区分②及び区分③にまたがる宝篋印塔が存在している。岡山県北東部～県南東部の宝篋印塔は、帯磁率が高い傾向にあり、個体差が著しい。また、県南西部は帯磁率が低い傾向にある。

5-2 宝篋印塔のプラン（設計図）と年代

国ごとの宝篋印塔の系譜関係や年代的位置づけを整理するため、図15を示した。この図は、13世紀末から14世紀代にかけての美作・備前・備中三国の宝篋印塔を国別かつ年代順に並べたものである。紀年銘がないものは、形式的な特徴によって年代を決定した。筆者がまだ図化していないものは、先行研究の成果を援用した（今岡2012）。

【備前国】

熊山宝篋印塔（11）を除くと、備前国には14世紀前半までの石塔が少ない。熊山宝篋印塔（11）は、そのほかの宝篋印塔と系譜関係が想定できず、出現の過程が不明である。また、銘文も追刻の可能性があり、13世紀末から14世紀代にかけての宝篋印塔に比べてかなり小型である点など、異質な点が多い。特に小型である点や隅飾が直立する点などは年代的に後出する宝篋印塔に認められる要素である。このため、現時点では熊山宝篋印塔の年代は13世紀末頃の所産としておくが、年代は暫定的なものとして、備前国の宝篋印塔の型式学的な分析結果を増加させ、改めて備前国あるいは周辺地域における位置付けを行うこととする。

【備中国】

堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）は同じプランを用いて建立されたと考えられ、直接的な系譜関係を把握できる希少な例である（柴田2023b）。堂応寺宝篋印塔（20）から満願寺宝篋印塔（21）にむけて型式変化していると想定される。堂応寺宝篋印塔（20）は紀年銘から14世紀前半に建立されたことが明らかであり、満願寺宝篋印塔（21）はその後の14世紀中頃に建立されたと考えられる（柴田2023b）。

堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）を、矢田（17）・道勝寺宝篋印塔（18）と比較すると、塔形や隅飾の外反具合、隅飾の高さと幅の比率に明らかな違いがあることから、両者に直接的な系譜関係は想定できない。

道勝寺宝篋印塔（18）は紀年銘がないため、矢田宝篋印塔（17）と比較する。隅飾高が隅飾幅に対して大きい点は、両者の共通点であるが、各部材の比率が異なっている。この点から、道勝寺宝篋印塔（18）は14世紀第2四半期から第3四半期頃に位置づけておく。

【美作国】

筆者は過去に、安蘇（4）・本山寺宝篋印塔（5）を用いて、14世紀前半の美作国の宝篋印塔に建立の基本となるプラン（設計図）が存在することを指摘した。安蘇（4）・本山寺宝篋印塔（5）は共通プランに基づいて設計・建立されており、14世紀後半以降になると、塔形に多様性が生まれたと考えられる（柴田2023a）。

例えば、清瀧寺宝篋印塔（3）は、相輪上部の受花と伏鉢がなく、隅飾の内側に梵字が刻まれている。観音堂跡宝篋印塔（2）や、1399年の銘をもつ本山寺宝篋印塔（（5）と同地点）は、笠の幅が狭くなり、隅飾が細くなっ

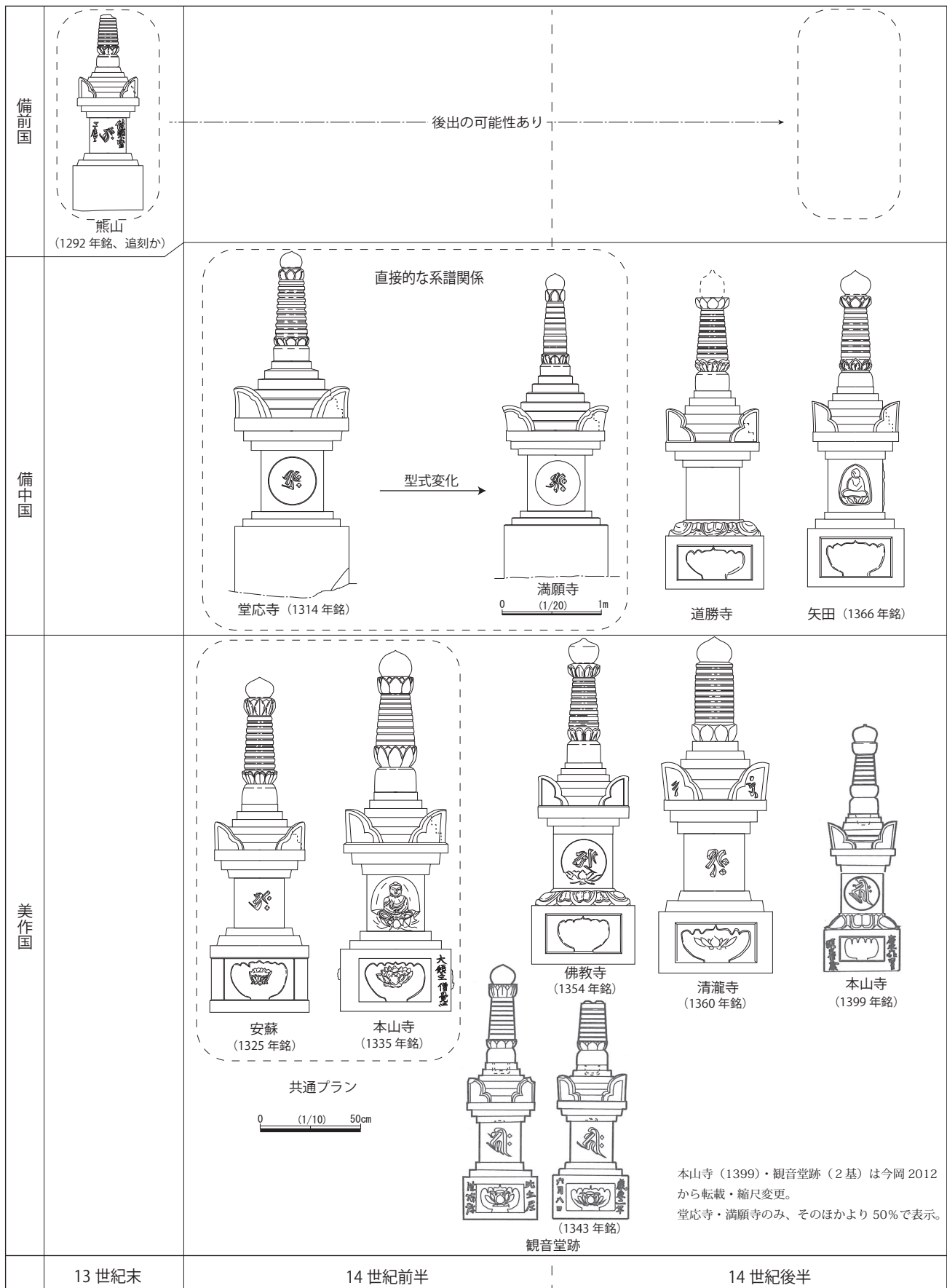


図 15 岡山県域の宝篋印塔の変遷図

たり、外反している。

このように、14 世紀中頃から後半にかけての宝篋印塔は、14 世紀前半のものとは比べて、塔のサイズや各部材の装飾が多様化する。この要因は、14 世紀中頃から後半にかけて、石塔の建立に複数のプランが用いられるようになったことであると想定される。

5-3 美作・備前・備中三国の石工集団の活動

先の分析で抽出した、美作・備前・備中三国の宝篋印塔の共通性や独自性、プランについては、石工集団の系統差が塔の形態的特徴に反映されていると推察できる。

中世の著名な石工集団としては伊派と大蔵派がある。これらの石工集団は東大寺の修理の際に宋から招かれた技術集団がわが国に定着し、全国的に活動したとされる（山川 2015 など）。美作・備前・備中三国において、伊派の活動痕跡が備中国に残されている。岡山県高梁市に所在する保月六面石幢・石塔婆・宝塔に刻まれた銘文からは、井野行恒（14 世紀初頭）の活動が確認されている（岡山県教委 2016）。

井野行恒については、同一人物と推測される「伊行経」が彫った笠神の文字岩からも備中国での活動が見出せる。笠神の文字岩は、鎌倉時代の徳治二年（1307）に、無類の難所であった笠神龍頭の瀬の航路開削を仏の加護によって成し遂げたとして、この難工事を記念し、工事の経緯を刻んだものである。本事業は、奈良の律宗寺院西大寺が援助した事業であり、伊行経（井野行経）は西大寺に代表される南都寺院の勧進僧（主に律僧）と関わりが深いことから、各国で活動していたと考えられる。このように、井野行恒の活動は備中にとどまらず大和・紀伊・摂津に及んでおり、美作・備前・備中三国の石塔出現期である 13 世紀末から 14 世紀前半頃は、南都に拠点を置く石工が備中でも活動していた。

畿内と備中国のつながりについては、堂応寺（20）・満願寺宝篋印塔（21）からもうかがうことができる。堂応寺宝篋印塔（20）の周辺からは、畿内の大工が活動した旨が記された瓦が出土しており（日本石造物辞典編集委員会 2012）、畿内の工人が藺東荘一帯で活動していたことが知られている。両石塔が所在している藺東荘は、代々中央が所領してきた荘園である（三好 1999）。両石塔には、塔形や隅飾などに畿内の宝篋印塔と類似する点があり、畿内の石工集団が両石塔の製作に関わった可能性が想定できる。



図 16 本山寺宝篋印塔に施された近江式文様

他地域の石工集団の影響は、近江式文様の存在からも追認できる。近江式文様は、主に宝篋印塔に陽刻された開敷蓮華文を指し、近江国を中心に分布している（図 16、日本石造物辞典編集委員会 2012）。美作国南部には近江式文様を有する宝篋印塔が確認されており、その数は観音堂跡宝篋印塔 2 基（2）、清瀧寺宝篋印塔（3）、安蘇宝篋印塔（4）、本山寺宝篋印塔（5）、誕生寺宝篋印塔（6）の計 6 基である。近江の宝篋印塔の比較によって、近江の石工集団から美作国や備前・備中国の石工集団が受けた影響を抽出できる可能性がある。この点は今後の課題である。

また、矢田宝篋印塔（17）の周辺でも石工の活動がうかがえる。鼓神社宝塔（16）は 1346 年に建立されたもので、高さ 4 m を超える大型品である。この宝塔の銘文には「大勧進沙門正因」「貞和二年（1346）十月二日造立之」「大工妙阿」とあり、正因が勧進し妙阿が製作したことがわかる。妙阿は、岡山市北区下足守に所在する葦守八幡宮の石鳥居（1361 年銘、国指定重要文化財）の製作にも携わっている。妙阿の名が認められるのは現時点でこの 2 例のみである。14 世紀中頃から後半では、活動範囲が備中に限られた石工が存在した可能性を指摘できる。

6 結 論

本論では、13 世紀末から 14 世紀にかけての美作・備前・備中三国の宝篋印塔を対象とした考古学的・理化学的分析を実施した。分析を通じて、分析対象の宝篋印塔に認められる共通性と独自性を抽出した。

美作・備前・備中三国では、14 世紀前半から畿内や近江の石塔（石工集団）の影響を受けた宝篋印塔がある。そして、14 世紀中頃から後半にかけて、塔数が増加するだけでなく塔形のバリエーションが豊富になる傾向にある。この現象は、美作・備前・備中三国の出現初期の宝篋印塔が、近江や畿内といった外部からの影響を強く受け、時期がくだるとともに在地化が進んだことを示唆する。先に、14 世紀中頃から後半にかけて、一国単位で活動する石工集団が出現したことを想定した。宝篋印塔の在地化が進んだことで地域の独自性が強まったことと、より狭い範囲で活動する石工集団が出現する点は、相関している可能性があるだろう。分析資料を増加させることで、石工集団の系譜関係がさらに整理できると考えられる。

また、石材の帯磁率計測によって、石塔一基あたりの部材で、帯磁率が異なる塔を確認した。このことは、部材によって石材の入手先が異なっていたことを示していると理解できる。共通プランを用いているにも関わらず、安蘇（4）・本山寺宝篋印塔（5）に帯磁率に近似値が見出せない点も、部材によって石材の入手先が異なることを補強する。以上を踏まえると、14 世紀代には、石工集団内で塔の製作と石材の調達が別働であった可能性を想定できる。石材の入手先の違いは、石塔の製作における分業体制を検討する上で重要な視点である。

今後、石塔の分析事例を追加し、山陰や四国、畿内、近江といった地域と比較することで、美作・備前・備中三国における詳細な地域的特徴や石工集団の系譜関係、石塔の製作工程や形成背景を明らかにしていきたい。

謝辞

本稿執筆に際して、畠山唯達氏から帯磁率計測や分析に関して多大なご支援とご教示を賜りました。館鼻誠氏・海邊博史氏からは本論の問題点を的確に御指摘いただき、先山徹、佐藤亜聖、森山由香里、若杉勇輝、有賀祐史、與嶺友紀也の各氏からは有益な御助言を賜りました。末筆ながら、皆様に心から御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 赤澤徳明 2020「石造物から見える福井県の概要」『中世・近世における笏谷石製品の流通とその展開』pp.1-9 奈良文化財研究所 福井・勝山日本遺産活用推進協議会
- 今岡利江 2012「中国」『中世石塔の考古学』pp.37-56 高志書院
- 大石一久 1999『石が語る中世の社会』ろうきんブックレット9 長崎労働金庫
- 岡本智子 2005a「日本における石造宝篋印塔の成立過程とその意義」『日引』6号 pp.1-22 石造物研究会
- 岡本智子 2005b「石造宝篋印塔の成立と展開」『奈良大学大学院研究年報』(10) pp.181-184 奈良大学大学院
- 岡本智子 2012「宝篋印塔」『日本石造物辞典』pp.1227-1229 吉川弘文館
- 大塚紀弘 2017『日宋貿易と仏教文化』吉川弘文館
- 岡山県教育委員会 1980『岡山県の文化財（一）』 <https://doi.org/10.11501/12706888>
- 岡山県教育委員会 1981『岡山県の文化財（二）』 <https://doi.org/10.11501/12706891>
- 岡山県教育委員会 2016『おかやまの石造物』
- 岡山市教育委員会 1992『矢田の宝篋印塔所在地発掘調査報告』 <http://doi.org/10.24484/sitereports.13247>
- 海邊博史 2012「四国」『中世石塔の考古学』pp.57-78 高志書院
- 川勝政太郎 1972『京都の石造美術』木耳社 <https://doi.org/10.11501/12423875>
- 川勝政太郎 1978『日本石造美術辞典』東京堂出版 <https://doi.org/10.11501/12423311>
- 黒川信義 2020「石造物研究と帯磁率・放射線測定」『中世石造物の成立と展開』pp.235-248 高志書院
- 熊山町教育委員会 1974『熊山遺跡』 <http://doi.org/10.24484/sitereports.12599>
- 狭川真一 2009「近畿の中世石塔」『日本の中世墓』pp.23-40 高志書院
- 狭川真一 2011a『中世墓の考古学』高志書院
- 狭川真一 2011b「阿育王塔の形について」『石造物の研究 仏教文物の諸相』pp.151-164 高志書院
- 狭川真一 2019（初出 2011）「額安寺宝篋印塔実測記」『奈良の石塔実測記』pp.34-40 私家版
- 柴田 亮 2023a「美作国南部における中世宝篋印塔の基礎的研究」『古代吉備』第34号 pp.66-79 古代吉備研究会
- 柴田 亮 2023b「備中国下道郡中世石塔考一堂応寺・満願寺宝篋印塔の分析」『日引』18号 pp.83-94 石造物研究会

館鼻 誠 2023「広島・岡山県下における石造文化圏の成立と展開—宝篋印塔にみる地域性と特質」『石造物科研 科学研究費補助金基盤研究（A）研究代表者・市村高男「石造物研究における中世日本技術・文化形成過程の再検討—東アジア交流史の視点から—」成果報告国際シンポジウムレジュメ集』 pp.9-11
中世葬送墓制研究会 2004～2007『中世墓資料集成』九州・沖縄編など12冊

永山卯三郎 1930『岡山県金石史』岡山県金石史刊行会
<https://doi.org/10.11501/1173755>

永山卯三郎 1954『岡山県金石史 続 本編』岡山県金石史刊行会
<https://doi.org/10.11501/3015183>

日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館

藤澤典彦・狭川真一 2017『石塔調べのコツとツボ』高志書院

山川 均 2015『石塔造立』株式会社法蔵館

挿図出典

図1～4：筆者作成、図5・6：岡山市教育委員会編1992より転載・縮尺変更、図7～15：筆者作成、図16：筆者撮影

表1・2：筆者作成

註釈

- 1) 大和系は主に奈良盆地一帯、京都系は京都・近江系は近江国で生産された石塔の特徴を有しており、各地域の石工の影響を受けたと想定される石塔を指している。ただし、これは各地域で生産された石塔が持ち込まれたものを示すものではなく、各地域の石工との関係性を意識した表現であると解される。
- 2) 日引石は福井県高浜町で産出される安山岩質凝灰岩である。良質な淡青緑色の石材が石塔に用いられた。日引石は、主に海運によって、対馬や五島、薩摩坊津、十三湊といった地域にもたらされたことが知られている（大石1999、赤沢2020など）。
笏谷石は、福井県福井市の足羽山で産出される凝灰岩である。越前石とも呼ばれ、青灰色や青みがかった緑色だが、部分的に淡褐色を呈する（石造物辞典編集委員会2012）。石塔のみならず、石垣や柵、門扉まで様々な用途で使用された。中世後期には在地のみならず、滋賀県下でも分布するようになる。遠くは佐賀県で、笏谷石製の層塔が見つかった（大石1999）。

(Received August 30, 2024; accepted December 30, 2024)